

株式会社晶文社 御中

上田と申します。突然のお手紙、まずは失礼致します。
貴社にて発行されている書籍である、

『誰も教えてくれない聖書の読み方』
(ケン・スミス 著、山形浩生 訳、晶文社、2001年、
ISBN: 978-4794964731)

に関して、お知らせしたいことがありまして、本書状をお送りさせていただきます。

『誰も教えてくれない聖書の読み方』(以下、「誰も」と略記)に関しましては、私は数年前に入手しました。そのときは内容をざっと読んだだけだったのですが、今年に入ってから時間があつたもので、旧約・新約聖書ときっちり併読を行った結果、「誰も」における聖書の引用章節番号にかなりの数の誤りがあることが分かりました。訳本である関係上、それらが原著の段階の誤りなのか、訳の過程で生じた誤りなのかが分かりませんでした。

そこで、この点をはっきりさせるために、NYのBlast Booksより、原著“Ken’s Guide to the Bible”を査収しまして、原著、旧約・新約聖書、「誰も」(訳本)を並行通読し、errataを作成しました。

errataを作成して驚いたのは、単なる引用章節番号に留まらず、引用箇所の手な足し・引きが複数箇所確認されたことです。具体的には、

- 原著にあるのに訳本で削られている箇所
- 原著にないのに訳本に存在する(山形様が追加されたのでしょうか?でもその旨コメントがあるというわけでもないですね)箇所

が複数確認されました。上記一番目はまあ仕方ないとしても、二番目の、山形氏が勝手に付け加えた箇所が何の断りもなしに存在するというのは、これはちょっといかななものか、と思いましたので、山形氏宛電子メールでerrataを送付したのですが、今日に至るまで何も返事をいただけないままです。

「誰も」に関しては、その書籍としての性質上、決して多くの冊数が出るとも思えませんし、改版がされとも思いません(個人的には是非改版していただきたいですが)。しかしながら、上述のような誤りや訳者の勝手な改竄は、この手の本には致命的な問題になると思います。

こう書くと大袈裟に思われるかもしれませんが、聖書を読む人の多くは、聖書に悪意ある(と、ツッコまれる側が主観的に感じるような)ツッコミがなされることを嫌悪するものです。その嫌悪を越えて、この本の持つ意義を読者に伝えるためには、瑣末な箇所でのこの本を、そういう人々が「無意味な本」と決めつけら

れないような周到さが必要なわけで、そういう意味では、以下に私が指摘する誤りの存在は大きな問題だと思われま

す。誤解しないでいただきたいのですが、私は「誰も」が非常に有用な本だと思っているからこそ、このような面倒かつ金銭的利益を生まない作業を行ってまでこの点を確認したのです。この本の中で山形氏もふれていますが、聖書根本主義に対するカウンターカルチャーとしての「誰も」の存在意義は、非常に高いものだと思っているのです。

先のブッシュ政権以来、現在に至るまでのアメリカにおける聖書根本主義の隆盛には、正直言って恐ろしさを感じます。二年前の年始に日本でも行われた、アーサー・S・デモス財団の「パワー・フォー・リビング」キャンペーン（久保田早紀、トレイ・ヒルマン、VERBAL from m-flo、そしてジャネット・リンを起用したテレビCMを御記憶かと思います）などでも分かるように、このような問題はもはや対岸の火事ではありません。聖書根本主義の主流であるプロテスタント福音派は、韓国でも非常に精力的に活動しており、それらの教派は日本においても活発に活動を行っています（たとえばオンヌリ教会による「ラブソナタ」キャンペーンなど）。

このような現在だからこそ、「誰も」は再び評価されるべきだと私は考えていますし、そのような再評価が行われる可能性は低くないと思います。だからこそ、この本に内在する誤ちは、正せるうちに正しておければ、と考える次第です。

是非、晶文社様、もしくは山形氏のサイトにて正誤表を公開していただければ、と思います。以下添付します *errata* をご確認の上、何らかのかたちで読者サイドに還元していただければ幸いです。

平成 22 年 3 月 23 日

上田 完 / Dr. Tamotsu T. UEDA

Errata

pp.55: 「アaronの代用息子の一人エレアザルが」は誤り。正しくは「アaronの孫(代用息子の一人エレアザルの子)ピネハスが」とすべき。これに関しては原著該当部 pp.34 でも “... *Happily, Eleazar, one of Aaron’s replacement sons, ...*” とあるので、原著段階での誤りであろう。

pp.55: 脚註「.....で、近くの街の人がやってきて」とあるが、これは「イスラエル人が宿営していたモアブの王バラクが」とすべきか。

pp.59: 申命記 25:11-12 と申命記 20:10-18 の間にあるはずの引用箇所(原著 pp.37 5 番目)が抜けている。

(原文)

God relishes the thought of starving sinners eating their children.
“Even the most gentle and sensitive man among you will have no compassion ... he will not give to them [his starving children] the flesh of his children that he is eating.”—DEUTERONOMY 28:53–57

(試訳)

神さまは罪人を飢えさせ、彼らが子供を食べるのを楽しむんだって。「あなたたちの中で一番おとなしく敏感な男であっても、哀れみの情を持つことはないだろう.....彼は彼ら(彼の飢えた子供たち)に、自分が食べているその子達の肉を与えないだろう。」—申命記 28:53–57

pp.62: 「犬のように舌で水をなめる者」は誤り。「水を手にすくってすすった者」が300人の兵隊である。尚、この箇所に関する記述は原著には存在しない。山形氏が無断で追加したものと思われる。

pp.67: 末尾 サムエル記上 11:5-7 とあるのは誤り。同 7:10 が正しい(原著では 7:10 になっている)。

pp.67: 上訂正部の後に入るはずの引用箇所(原著 pp.42 4 番目)が抜けている。

(原文)

Saul, the first God-anointed king of Israel, ensures that Israel’s people will follow him into battle by threatening to kill all of their oxen.—I SAMUEL 11:5–7

(試訳)

はじめて神に油注がれたイスラエルの王であるサウルは、イスラエルの民の牛を皆殺しにすると誓すと、彼らが自分に従って戦ってくれるということを証明したんだ。—サムエル記上 11:5-7

pp.69: ダビデがゴリアテを殺すくだり：訳はケンの記述に忠実だが、これはケンの勘違いでは？以下、該当箇所を新共同訳および欽定訳から引用する：

ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。ダビデは走り寄って、そのペリシテ人の上にまたがると、ペリシテ人の剣を取り、さやから引き抜いてとどめを刺し、首を切り落とした。ペリシテ軍は、自分たちの勇士が殺されたのを見て、逃げ出した。—サムエル記上 17:49-51

And David put his hand in his bag, and took thence a stone, and slang it, and smote the Philistine in his forehead, that the stone sunk into his forehead; and he fell upon his face to the earth. So David prevailed over the Philistine with a sling and with a stone, and smote the Philistine, and slew him; but there was no sword in the hand of David. Therefore David ran, and stood upon the Philistine, and took his sword, and drew it out of the sheath thereof, and slew him, and cut off his head therewith. And when the Philistines saw their champion was dead, they fled.—I SAMUEL 17:49-51

これらを見ると分かるように、ダビデはゴリアテを石で打ち殺した後に、(自らは武器を帯びていないので)ゴリアテの剣で首を切り落としたことになっている。

pp.69: 末尾本文・脚註：ペリシテ人を殺した人数は日本語の聖書だけではなく欽定訳でも 200 人。100 人という人数はどこから？

pp.84: 歴代誌下 26:16 とあるのは誤り。同 26:16-21 が正しい(原著でこうなっているのを確認済)。

pp.101: イザヤ 34:2-3 と イザヤ 26:19 の間にあるはずの引用箇所(原著 pp.42 4 番目)が削除されている：

(原文)

To dramatize His gloomy prophecies against Egypt, God makes Isaiah walk around nude for three years—ISAIAH 20:2–4

(試訳)

エジプトに対する悲観的な預言をドラマティックなものにするために、神さまはイザヤを裸で三年間歩かせる。—イザヤ 20:2–4

pp.102: イザヤ 49:14-15 に相当する引用箇所は原著に存在しない。山形氏が無断で追加したものと思われる。

pp.123: セファニヤ 1:2–3 と セファニヤ 1:18 の間にあるはずの引用箇所(原著 pp.78 4 番目)が削除されている:

(原文)

“That day will be a day of wrath... I will bring distress upon people... their blood shall be poured out like dust, and their flesh like dung.”—ZEPHANIAH 1:15–17

(試訳.....訳文は新共同訳聖書による)

その日は憤りの日.....わたしは人々を苦しみに遭わせ.....彼らの血は塵のように はらわたは糞(ふん)のようにまき散らされる。—セファニヤ 1:15–17

pp.139-140: 「無原罪の御宿り」がクレアヴォーのベルナルによるものとあるがこれは誤り。ベルナルは反スコラ派の宗教学者で、むしろ「無原罪の御宿り」という概念に反対する立場にあり、ここに挙げるならばヨハネス・ドゥンス・スコトゥスが適切(これに関してはケンの記述の段階からこうだったことを確認済)。

pp.156: ルカ 8:28–34 とあるがこれは誤り。同 8:43-46 が正しい(原著ではこうなっている)。

pp.167: ヨハネ 28–30 とあるが、章番号が抜けている。ヨハネ 19:28–30 が正しい(原著の段階で抜けていたのを確認済)。

pp.178: ヨハネ 8:47 とあるがこれは誤り。同 8:42 が正しい。

pp.178: ヨハネ 8:42 と ヨハネ 8:55 の間にあるはずの引用箇所(原著 pp.111 3 番目)が削除されている:

(原文)

“He who belongs to God hears what God says. The reason you do not hear is that you do not belong to God.”—JOHN 8:47

(試訳.....新共同訳からの引用)
神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に
属していないからである。」—ヨハネ 8:47

pp.186–187: バルナバとなっているのは誤り。バルイエスが正しい(原著ではバ
ルイエスとなっている。ちなみにバルナバとバルイエスは別人である.....バ
ルナバはパウロと同じアンティオキアの教会にいた聖職者で、パウロの最初
の宣教の旅に同行したといわれている)

pp.203: 1 コリント 6:18–19 と 1 コリント 11:3–15 の間にある引用箇所(原
著 pp.126 3 番目) が削除されている :

(原文)

“Do you not know that your bodies are members of Christ him-
self? Shall I then the members of Christ and unite them with a
prostitute? Never!”—I CORINTHIANS 8:47

(試訳.....新共同訳からの引用)

あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないの
か。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決
してそうではない。—1 コリント 6:15

pp.211: ヘブル人への書 12:6 とあるのは誤り。同 10:28–31 が正しい(原著
ではこうなっている)

pp.214: 「923 ページある聖書の、902 ページ目でやっど。」とあるのは誤
り。「923 ページある聖書の、907 ページ目でやっど。」が正しい(原著では
こうなっている)

以上。